

アルゼンチンの片隅で

ラ・リオハ大学 名誉教授 金子 正 登

経 歴

1967年、東京外国語大学スペイン語科を卒業、日立グループのエレクトロニクス専門商社(現日立ハイテクノロジー)に入社。翌1968年、アルゼンチン(亜国)のブエノスアイレスに赴任、約8年間駐在。その後、ブラジル、香港、米国、ドイツ、英国、メキシコにも滞在。2006年から4年間、JICAシニアボランティアとして再びアルゼンチンに滞在。

1. はじめに

私にとって、アルゼンチンは人生最初の海外であり、ビジネスの厳しさを体得し、結婚をして2人の子供が生まれた特別の思い出の強い愛すべき国です。

アルゼンチン滞在は累計12年になりましたが、最後の2年間は、ブエノスアイレスの北西約1,200kmに位置するアンデス山脈麓のラ・リオハ州に滞在しました。今回は、州都ラ・リオハ市にある国立ラ・リオハ大学の経済学部客員教授としての貴重な経験をご紹介します。

2. アルゼンチンとは

東京からアルゼンチンの首都ブエノスアイレスまで最短距離で約23,000km、日本から見て地球の反対側に位置します。NYあるいはLAX(ロサンゼルス国際空港)経由での飛行所要時間は26時間、日本から地球儀を突き刺すとアルゼンチン、ウルグアイの大西洋沖合に出ます。時差は12時間、季節も全く逆です。

アルゼンチンは南緯20~50度で、日本より若干南北に長く、熱帯から寒帯までの多様な自然に恵まれています。国土は日本の約7.3倍、人口は3,700万人で、23の州と連邦首都としてのブエノスアイレス市によって成り立ち、首都圏の人口は約1,100万人です。

“アルゼンチンは南米のヨーロッパ”“ブエノスアイレスは南米のパリ”と言われ、国民の97%がヨーロッパ系(主として、スペイン系、イタリア系)の移民という歴史的背景もあり、国民は出身地であるヨーロッパに対するノスタルジーや憧れがあります。19C末から20C初頭にかけて経済的に繁栄を極め、有り余った経済力を背景に、街も建築物も基本的にはヨーロッパを意識し、ヨーロッ

パ以上のレベルの建設を目標としたようです。そのため、ブエノスアイレスのみならず、地方都市にも当時の建築物が多く残っています。あくまでも、私の個人的意見ですが、アルゼンチン人の特質は、“異常にプライドが高いこと”“井の中の蛙”“世間知らず(世の中を知ろうとしない)”ととらえています。

3. 日本とアルゼンチン

15Cから16Cにかけて、フィリピンやタイに代表される東南アジアやメキシコ、ペルーに日本人が居住していたという文献が残っているようですが、アルゼンチンでも16C末にFrancisco Japon(フランシスコ・ハボン)と名付けられた21歳の日本人奴隷が存在したという1596年付けの文書が残っているようです。

当時、中南米植民地政策を進めていたスペイン軍とキリスト教布教を目的としたイエズス会は、常にペアで動いていたようです。スペインにとりフィリピンは日本を含めたアジア植民地政策の拠点で、フィリピンとメキシコ、ペルーの間には定期航路が存在していました。このルートを通り、1人の日本人が奴隷としてはるばるアルゼンチンまでたどり着いたと思われます。

現在では、1887年(明治19年)にコルドバに到着した牧野金蔵さんが、記録も写真も子孫も残っている最初の日本人移民として認定されています。牧野金蔵さんは直参旗本の次男で、経緯は不明ですが、英国船の船員になり、世界中を航海している過程で、ペルー、チリ経由でコルドバに到着しました。英国船の船員として英語を習得していたことから、当時、英国資本で経営されていた鉄道にボイラーマンとして採用され、アルゼンチン女性と結婚、後には機関士にまでなったようです。

日本からの移住は、20C初頭にスタートしました。初期の移住者は、移民振興会社(のち、移住事業団)が買い取った移住地に入植し、主に農業に従事しましたが、農業経験者はともかく、未経験者も多く入植したようです。

移住地は、アルゼンチン全土にわたっていましたが、土地が肥沃であるか否かの問題等で辛酸をなめ、脱農せざるを得なかった移住者達は、ブエノスアイレスに出て、工場労働者、タクシー運転手、カフェ、庭師として生計を立てたようです。長期にわたって日本移民の代表的な職業は、洗濯業、カフェ、花卉栽培でした。大都市には、今でも多くの日系ランドリーが存在します。また、戦前、カフェの大部分は日系人経営によるものでした。

花卉栽培に関しては、日系業者が牛耳り、各地の花卉組合の責任者を日系人が占めた時期もありました。ブエノスアイレスをはじめ、大都市周辺には、花卉栽培を専門とする集落が形成され、多くの成功者が現れました。現在は、残念ながら、コロンビア、エクアドル等から良質で安価な花が輸入され、低迷を余儀なくされ、昔日の面影はありません。

4.アルゼンチンの片隅で

ブエノスアイレスの北西約1,200kmに位置するラ・リオハ州は、人口が僅か33万人で、ワインとオリーブ油が主産業の極貧州の1つです。

この地域には、先住民とアラブ系(シリア、レバノン)移民が多く見られ、全土のカトリック率は約93%ですが、この地域は53%です。日系移民史によると、1928年に1人の日本人男性が居住していたらしいのですが、現在は皆無です。逞しい往年の日系移民でも近づくことの出来ない程の厳しい自然環境だったのかも知れません。私も年間降雨量が僅か200mm前後の乾燥地帯で、盛夏の一月には50℃を超える日も経験しました。

客員教授として赴任したラ・リオハ大学は、約24,000人が在籍する地方有数のマンモス国立総合大学で、広大な敷地に独自のオリーブ畑、オリーブ油工場、総合病院、考古学博物館やFMラジオ局、テレビ局を擁しています。

教職員数は1,250人で、州内に6か所の分校を擁しています。当初の赴任目的は、経済・経営学

部の品質管理研究所を拠点に、地元の中小企業を対象にした経営指導をすることでしたが、理論だけではなく経験・実践も有するという条件に合致する教授達の人選が遅れ、指導チーム組織化が遅れたことから、不定期ですが、私が“貿易の基本”“マーケティングの基本”“日本の企業文化としてのKAIZEN”をテーマに講義を担当しました。

特に“KAIZEN”のテーマは、日本の歴史や日亜間の友好の歴史にもふれながら講義することが好評で、当初、大学生を対象にした講義も、大学院生・付属高校生・教授達・職員・分校・隣接する他州の国立大学や学内で開催される各種学会を含め、その対象が広がっていきました。

また、約250人の職員を対象にした講義では、“5Sに基づく全学美化”キャンペーンを提案し、参加者から多数の賛同を得ました。各職場単位で小グループを編成、全学美化のための具体策を討議してもらい、再度、打合せの機会を持つことになりましたが、たまたま訪れた三連休に、彼らが特別出勤し、「KAIZEN!KAIZEN!」と声を上げながら各人の職場とその周辺の整理整頓を実施したのには驚かされました。

その後、全講義室と校内各所に各100個ずつのごみ箱と灰皿を設置する等、美化運動は徐々に浸透していき、私の帰国時には教職員と学生代表が運動を引き継いでくれ、校内美化は見違えるほどのレベルになりました。この活動が認められ、帰国時には名誉教授の称号もいただくことができました。



■大学での講義の様子